

クラークソン書簡始末

その(一) 神戸女学院関係書簡概要

吉 年 ユ ウ 子

クラークソン女史(Miss Virginia Alzade Clarkson, 1850 - 1940)は、米国伝道会(American Board of Commissioners for Foreign Missions. - A.B.C.F.M.)の独身婦人宣教師として一八七七年十一月に来日した。以来、一八八二年一月に健康上の理由で帰米を余儀なくされるまで、神戸の「女學校」に在って働いた。第二代校長となり、校名を「神戸英和女學校」と定め、教育課程の整備を行い、知的教育と宗教教育の両立をめざしたが、学校経営の実務には心身を勞することが多く、殊に金銭面での煩勞は身にこたえたという。

クラークソン女史は筆マメで、伝道会本部宛ての報告書簡も多数であるが、『学院史料』では、女史の書簡のうち、米国伝道会の任命を受けた女史が、伝道会本部のクラーク博士(Rev. Nathaniel George Clark, D.D., 1825 - 1896)と交信を始めた時点から、来日、先任宣教師たちとの交流、学校での教育・運営両面における様々な努力や経験を経て、病気のためついに日本を離れる直前までの、計二九通を訳出、註解して掲載してきた。これは第五号をもってぎりぎりだったので、本稿においてはこれらの書簡の概要をとりまとめおきたい。

なお、書簡の宛名はおおむねクラーク博士であるが、そうでない場合は発信地のあとにその名を記すこととする。

第一四〇号 一八七七年四月二十三日附 ブルックライン発。

○ライフ・ワークとなるはずの活動について。少し助言をいただきたいこと。

第一四一号 一八七七年四月三十日附 ブルックライン発。

○日本で働けることは大いなる恵みとは思うが、元来自分の心はトルコの方に向いていたこと。

第一四二号 一八七七年九月十二日附 ニューベリーポート発。

○クラーク博士信入手のこと。金曜日の集会でカーティス氏夫妻に会えるのを楽しみにしている。

第一四三号 一八七七年八月二十九日附 ニューベリーポート発。

○健康状態は良好。出発は十月では如何。

第一四四号 一八七七年八月十七日附 ニューベリーポート発。

○当地にやって来て以来、健康を取り戻していること。日本への出発は早い方が望ましいと思う。

第一四五号 一八七七年八月二十九日附 ニューベリーポート発。

○出発に関する通知受領の報。日本での活動を待ち望んでいること。

第一四六号 一八七七年十月六日附 プロヴィデンス発。

○当面の滞在地を知らせる。トランクの鍵は自分で携行したい。当市にて『皇国』の著者グリフィス氏に会えるのが

楽しみ。

第一四七号 一八七七年十二月二十日附 神戸発。

○日本到着の報へ船旅の疲れ。横浜でグリーンシ氏夫妻に会ったこと。／活動への期待。しかし神戸に留まることが賢

明かどうか疑問。／友人の来日を期待する。』

第一四八号 一八七八年二月二十一日附 神戸発。

○前便の至らぬ点について詫びる。当地の学校業務における居心地の悪さについて。学校の少女たちを愛していること。日本語の難しき。

第一四九号 一八七九年七月二日附 神戸発。アッキンソン氏宛。

○書籍基金と設備費について口添えを乞う。

第一五〇号 一八七九年六月十四日附 神戸発。トゥロウブリッジ夫人宛。

○オルガンとスツール及びオルガン教則本の発註を乞う。

整理番号なし 一八七八年九月十七日附 神戸発。

○クラーク博士の写真と二通の手紙についての感謝。タルカット女史には学校を離れて活動に専念する気はないように見える。

—以上、『学院史料』第一号所載。—

第一五一号 一八八〇年三月五日附 神戸発。

○学校のことへ生徒数。五年間の「教育課程」制定。生徒たちの宗教生活。日本人教員の実情と問題。

第一五二号 一八八〇年三月二十七日附 神戸発。

○デフォレスト氏から紹介された吉田氏を教員として採用したいこと。日本語と日本の習慣を学ぶのに年長の一生徒のおかげを蒙っていること。図書資金、教材器具資金の用途について。

○親展。タルカット女史が神戸を離れるであろうことをめぐって。ホワイト女史の来日を望んでいるが、パームリー

女史が来ると思うこと。生徒用英語図書及び設備器具の必要性。教育課程の写しを送る。

—以上、『学院史料』第二号所載。—

第一五三号 一八八〇年六月一日附 神戸発。

○学校の現状報告へ生徒数とその動向。吉田氏の影響力。九月から予備的コースをつけ加え、通学生増加に努めたいこと。収支報告（一月～五月）。門番用の台所と住宅の不可欠なこと。図書の発註。設備器具に関する希望。タルカット女史は京都か岡山に移り、ダッドレー女史とバロウズ女史も学校を去って、婦人伝道に専従することになったこと。ホワイト女史の来日を願う。先任三女史についてのコメント。

第一五四号 一八八〇年六月十五日附 神戸発。

○「海外宣教師から本国の教会及び信者に対する特別アピール」と題する回状に対する弁明（日本人教師のこと。教材器具について。定期刊行物寄附の依頼について。本国の青年女子の会からの援助の件について）。

第一五五号 一八八〇年八月三十日附 比叡山発。

○最近のクラーク博士信に対する弁明―知育と宗教教育との比重について、「誤解を解くために」着任以来の事情を陳述する（先任婦人宣教師との関係。学校における自分の立場。教育事業と伝道活動の両立から生じた人間関係上の齟齬と誤解。その教訓）。自分は常に、生徒たちがイエス・キリストを識るよう導くことに努めていること。

—以上、『学院史料』第三号所載。—

第三四六号 一八八一年一月十八日附 神戸発。

○学校の現況へ生徒の数とその動向。受洗者と求道者。新しい台所の完成。生徒数増加と諸物価高騰による財政難。
ジェンクス氏の勘違いによる赤字。学校の財政的自立について―大阪と神戸の事情の違い。

第三四七号 日附、発信地、第三四六号に同じ。

○親展。周田の人々の誤解について。設備手当に関する示唆への感謝。昨年度の支出の内訳。カトラ―女史、ホワイ
ト女史のこと。オルガンの購入を中止したい。

第三四八号 一八八一年二月八日附 神戸発。

○オルガン購入中止について―しかし、一台は必要なこと。カトラ―女史からの便りを心待ちにしていること。生徒
と二人の日本人男子教員の協力。新人生について。

第三四九号 一八八一年五月二十三日附 神戸発。

○親展。クラーク博士の手紙に対する返信へ生徒援助の件。来年度の見積りに関して―神戸の宣教師の批判に悩んで
いること。必要経費の説明。

第三五〇号 日附なし、ニューヨークにて投函。本部着一八八二年七月十三日。

○出発の予定変更。ヘイドン博士に会ったこと。

―以上、『学院史料』第四号所載。―

第三五一号 一八八一年八月十七日附 札幌発。

○親展。夏前から健康を損ね、現在札幌で保養中。学校と学舎に対する、吉田氏、ダッドレー女史、おふじさんの援
助協力。炊事部門での生徒の自立。デイヴィス女史は兄デイヴィス氏の意向もあり、学校着任は無理。生徒に対す

る援助の事由。一般支出、学校経費に関する説明。オルガン到着を感謝する。

第三五二号 一八八一年十月二十二日附 神戸発。

○参考図書未着分の報告—なお入手希望のこと。

第三五三号 一八八一年十月二十日附 神戸発。

○クラーク博士の手紙に対して—仕事仲間をもつことと自分の資質の「特異性」について。病氣と仕事との関係について。帰米について思いめぐらすこと。設備費の増額を願う。昨年度の支出の概算報告。学校の寄宿部門が経済的自立を達成。

第三五四号 一八八一年十二月二十日附。

○クラークソン女史に関する日本伝道団の決算報告。

第三五五号 一八八一年十二月六日附 神戸発。

○祖父の死の報を受け取ったこと。

第三五六号 一八八二年一月五日附 神戸発。

○自分の帰米に関して〈伝道団満場一致の決議。自分自身としては、最初のクラスの卒業を見届けたこと〉。

第三五七号 一八八二年一月二十五日附 神戸発。

○英国人医師 T・C・ソトニクラフトの診断書（休養のための帰国を勧告）。

以上、『学院史料』第五号所載。